

## 新任のつばき

空井葉子

私が幼稚園に勤めたいと思った動機は、子ども（幼児）達と一緒に生活したら何かおもしろいことがあるにちがいないという期待である。おもしろさとは、大人とは異なる子どもの意識や感覚にふられることと身体中をフル回転させて具体的な事象と関われるということである。幼稚園での生活が始まって二ヵ月。私の期待は裏切られなかった。子ども達やすてきな先輩の先生方に囲まれた生活はたいへんな事も多いが、たいへん楽しいものである。

私が受け持っているのは四歳児（年中児）二十五名で、ベテランの先生が週に二日、一緒に保育に携わりな

がら細かい指導をして下さっている。入園式から二ヵ月経って、子ども達も私自身も四月の緊張がとけ、地が出て始めているところである。子ども達の魅力のひとつは、その正直さであると思う。保育者側が示す遊びや活動、お話等がおもしろいかどうかに実に敏感に反応する。つまらなければ全くそっぽを向いてしまう。規則についてもこちらが中途半端な気持ちでいると決して身につけてはくれない。そのかわり真剣な関わりや子どもの興味に即した関わりにはキラキラした瞳で応えてくれる。本当に困っている時には手助けしてくれる。こういった子ども達の正直さ、率直さに接していると、子どもは知識や

潜入観にとられず、様々な事象の本質を的確につかみ取る素晴らしい能力を持っているように思えるのである。

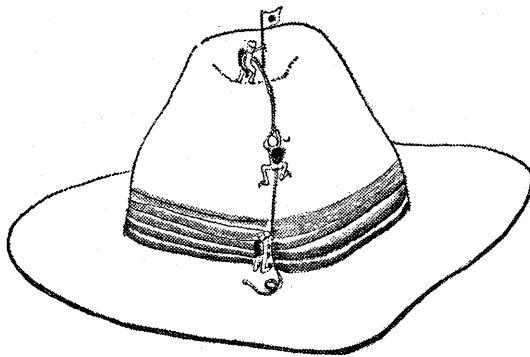
子ども達のもう一つの魅力は、子ども自身が自分の全存在を賭けて、懸命に生きているということである。ひとりひとりが各家庭や今までの経験を背負って幼稚園に集まってくる。新しい友達や遊びとの出会いの中で、身の処し方を体得していく過程、よりおもしろい遊びを工夫し、産み出していく過程、欲求が満たされなかった時のショックを乗り越えていく過程等、それぞれの子どもによって行動は様々だが、そのいずれも実にたくましく、子ども達の懸命に生きていくエネルギーを見せつけられ、圧倒されてしまう毎日である。ここで子ども達の工夫する力、発想の豊かさに驚かされた「色水遊び」に少し触れてみたい。

色水遊びは四月中旬に、年長児が持っているのを見て自分もほしくなった子ども達から始まった。年長児はチョークを短かく切ったものをビニール袋に入れ、色水を

作っている。黒板がめちゃくちゃになることを恐れて、私のクラスにはほんの少ししかチョークは出してない。そこである子どもは使いかけのクレヨンを集めたカンの中から適当な長さのものを見つけて水につけてみる。もちろん色は出ない。そのうちどこで知識を得てきたのか、水性ペンで色を塗った紙を水に入れ始める。これは大成功。きれいな色水の出来上がり。手近に油性マジックがあれば、そこで紙に色をつけて水に入れる子もいる。これは失敗。不思議に思いながら色水作りを繰り返すうちに、同じ色のペンでもペンの種類によって色水ができるものとできないものとあることがわかってくる。わかった子どもはまだよくわからない子どもに得意気に教えたりする。単色だけでなく何色かを紙に塗って、どんな色の水になるかを試す子どもも出てくる。さらには油粘土を入れたり、セッケンを入れたりきれいな包装紙を入れたり、草花や泥を入れたり……。最近ではビニール袋の裏側に直接水性ペンで色を塗り、色水を作る子どもも現われた。何も入っていないのにきれいな色水が

できているので、驚く保育者に得意そうに説明してくれ  
る。子どもの発想の豊かさには正に目を見張るばかりで  
ある。しかし保育者としてはおもしろがってばかりもい  
られない。色水遊びが始まると水の袋が乱暴に振り回さ  
れて破裂したり、穴が開いたりで床が水びたし。ぬれた  
粘土を扱った手でガラス窓をさわれば見事な手形のでき  
上がり。そのたびにあちらこちらと飛び回らざるを得な  
くなる。

子どもの自由な発想を最大限に実現させたいと思うの  
だが、限りある教材と保育時間そして園生活の秩序を保  
つためには、ある程度子どもの行動を制限せざるを得な  
くなる。これが新米保育者には難問のひとつである。前  
にも述べたように、子どもは保育者の態度の曖昧さに実  
に敏感である。はつきりと困ることは困ると言わなけれ  
ばやりたい放題である。子どもの発想をおもしろがって  
いるだけではいられない。ついつい笑顔で「困るわ」と  
言ってしまったら、あわてるのをおもしろがられて大洪  
水になってしまう等の失敗は数限りない。物わかりのい



いお姉さんではいられないということを変更して実感させられる。

私の勤めている幼稚園では自由保育の形態をとっている。個々の発達を保障していく上で自由保育という方法はとても有効だと思う。しかしそれは保育者が各子どもの発達段階や成長の見通し、集団性を考慮した許容範囲を把握し、それを実現していく保育技術を身につけていることで、初めて有効なものとなる。私の場合は放任と紙一重で全くの綱渡りの状態である。さぞ先輩の先生方はハラハラしているだろうと思うのである。ハラハラさせながらもなんとか一人前の保育者になればいいが、そのためにはずい分と多くの課題を乗り越えなくてはならないようだ。

「あなたと遊んでも子どもはあまりおもしろくないと思う」

これは教育実習中に私が受けた批評のひとつである。今でも私の心に深く刻み込まれ、とても考えさせられる言葉である。子どもにとっておもしろい遊びとは何か。

たぶんそれは子どもの欲求や好奇心を満たし、かつ気持ちよく遊べる活動であろう。つまり子どもをよりよい方向に成長させるような性質を持つ遊びであるだろう。こういういった遊びを保育場面の中で実践していくためには子どもと同じ視点に立ちながら先を見通していく力や振舞い、大人としての「良い成長の方向」を明確にしておく必要があると思う。保育者自身の好奇心や発想の豊かさ、常識・知識等が問われるところである。保育という活動は子どもとの瞬間々々のぶつかり合いの積み重ねであると思う。保育場面で考え込んでいる暇はない。だからこそ実践の中での反射神経が問われるのだと思う。日常の自分自身の意識・考え、行動全体が問われるのだろうと思う。幼稚園での生活に慣れ、地が出てくるに従ってその思いは強くなる。まずは「片付ける」ことの苦手をささどう克服するか。これが当面の私の重要な課題のひとつである。

(横浜学園附属元町幼稚園)